

## 国語科授業力の向上に関する予備的考察

ー調査内容の明確化を中心にしてー

中 谷 雅 彦  
前 田 真 証

(平成九年九月十日 受理)

### はじめに

本研究の目的は、「国語」の免許法認定講習を受ける小学校教師が自ら国語科授業力の向上を願い、その手がかりを得ていくような調査項目のあり方を明らかにすることである。

#### 一 国語科授業力を見抜くための調査方法

教師自身の自覚と結びつけて国語科授業力をとらえる方法としては、次の四点が考えられよう。

- ① 選択肢設定のアンケート法：授業力の観点ごとに設定された選択肢から、該当するものを選んでもらい、その結果の分析から授業力をとらえる方法
- ② 記述式アンケート法：国語科授業に関する多くの質問への簡単な自由記述の回答の分析から授業力をとらえる方法

③ 記述法：各自に、国語科授業力について診断し、記述してもらった一まとまりの文章を取り上げて、授業者のうちに自覚されつつある国語科授業力を引き出す方法

④ インタビュー法：実践者に直接会って、授業力(形成)の観点からの質問をして授業力をとらえる方法

⑤ ①のばあいは、例えば教材把握力に関して、選択肢としてア 何よりも教師自身の自力で教材の特性、教材の価値を見抜くことを心がけている。

イ まず教科書教材を大事にして、学習者を念頭においた教材研究(解釈)を目ざしている。

ウ 教科書教材にこだわらず、学習者の興味・関心、学力等に合った教材の選定、発掘に努めている。

をあげ、①最も心がけていること ②十分でないこと などの観点から該当するものを選んでもらうという方法であるが、このような方法

から授業力をとらえるという先行研究はまだみられないようである。この方法は、多くの教師に短時間で答えてもらえることができ、資料も多く入手しやすい。認定講習を受けに来た国語科担当者の意識した授業力の傾向をかなり客観的に、統計的にとらえられるよさがある。しかし、(A)どこまで適正な選択肢を設定できるか、(B)実践上の苦悩など内面的なものがどこまでとらえられるかが課題であろう。なお、この調査方法による先行研究例としては、国語科授業力をとらえる調査ではないが、静岡大学の高木展郎氏の、一九九三年(平成五年)八月に静岡県教員免許法認定講習会で六十名の小学校教員を対象とした「国語科授業観の形成の拠点」に関するものがある。高木氏はその結果を、一九九四年(平成六年)八月の第八回全国大学国語教育学会で報告され、それを「国語科教育第四十二集」(全国大学国語教育学会編集、学芸図書、平成七年八月一九九五年)三月三十一日発行、一二三―一三二ページ所収)にまとめられている。

⑥の方法を用いた先行研究例としては、同じ静岡大学の高木展郎氏の「国語科授業に関する教師の力量形成の拠点―小学校を例として―」(静岡大学教育学部研究報告「教科教育篇第二四号、平成五年八月一九九三年」三月二五日発行、三五―五六ページ所収)がある。本研究でのアンケートは、一九九〇年度と一九九一年度の二年間にわたり、高木展郎氏が、静岡県の竜洋北小学校の先生方と共同で国語科の授業研究を重ねてこられたことを振り返り、「小学校における国語の授業において、教師がどのようなことによつて国語科の授業改善を図っていくのか、ということの拠点をあきらかにするために」実施されたものである。アンケートの対象は、竜洋北小学校の学校長、教頭を除く十四名の先生方、実施時期は、一九九二年三月、回答方法は、自由形式の記述式とされて

いる。「力量形成」そのものでなく、その「拠点」を明らかにすることがねらいであり、また、国語以外の多くの教科も指導する小学校教師が調査対象であることから、アンケート項目は次のように多岐にわたっている。

○教職経験年数と性別 ○免許状として持っている教科目

1 先生が得意とされている授業科目は何ですか。その理由をお書きください。

2 先生が不得意とされている授業科目は何ですか。その理由をお書きください。

3 子どもたちにとって、どういう授業が望ましいと思われますか。

4 教師にとって、どういう授業が望ましいと思われますか。

5 教師の専門力量とはどのようなことだとお考えですか。

6 先生のこれまでの教職経験の中で、教師としての力量が形成されたのはいつ、どこで、どのようにだとお考えですか。

7 国語の授業についてのご意見をお聞かせください。

(1) 国語の授業は何のために行うと思われませんか。先生のお考えをお書きください。

(2) 国語の授業を行うにあたって、教師として必要なことは何だとお考えですか。

(3) 先生にとって国語の授業は楽しいですか、苦痛ですか。その理由をお書きください。

(4) 国語の授業を上手に行うためには、どのような条件が考えられますか。

(5) 国語の教材研究を行うときに必要とお考えになるものは、

何ですか。上位五つ必要な順にお書きください。またその理由もお書きください。

8 竜北方式についてのご意見をお聞かせください。

(1) 優れている点はなんだとお考えですか。

(2) 竜北方式に不足しているものはありますか。ありましたらそれについてお書きください。

9 本年度に行われた校内研修会で、有意義だったとお考えのものを上位三つまで順にあげてください。また、それぞれについてその理由をお書きください。

力量形成の「拠点」を明らかにするために考慮された調査項目（質問）がとりあげられているが、「拠点」でなく「力量形成（過程）」そのものを明らかにすることがねらいであったら、国語の授業内容・方法にしばったもっと具体的な質問項目があげられたことであろう。いずれにしても、この記述式アンケート法は、記述（回答）時間との兼ね合いで、教師の生き方とかかわる内なる思いが引き出せる項目をどのように設定できるかが課題である。

③の記述法を用いた研究例の一つとして、「国語教師の指導力形成過程に関する一考察—文芸教育実践史の記述を手がかりにして—」（中谷雅彦・前田真証稿、「福岡教育大学国語科研究論集」第三八号、平成九年（一九九七年）一月発行、一〇〇ページ所収）がある。これは、教職歴十数年の小学校教師に、「私の国語教育実践の歩みを振り返って」と題して、できるだけ実践史の時期区分をして記述してもらったものを、「物語」を取り上げた事例（九一名中二名）について、ある時期から次の時期にどのように進展していったかを見抜き、どういう実践からど

ういう実践へ進んでいったかを導きだしたものである。ただし、国語科授業力そのものの診断・記述と結びつかなくては、国語科指導力の実態はあいまいなままであり、間接的な取り組みにとどまってしまう。また、どのように書いてよいかわからない方には、典型的な事例を提供する必要がある。

④のインタビュー法は、直接実践者に会って自在に聞きたいことが聞けるというよさはあるが、具体的に授業力の典型をとらえようとすると、多くの実践者への長時間にわたるインタビューが必要となり、現実的でない。ただ、記述法と組み合わせ、記述の中にもっと具体的に聞いてみたいことがあれば、それについてインタビューをするという形をとれば、この方法は有効に機能するであろう。

以上のように考えてみると、教師の国語科授業に対する自覚を促すには、典型的な国語科授業力診断、国語教育実践史の事例を提供し、自らの国語教育実践史と結びついた形で国語科授業力を診断してもらう形式、すなわち、③を中核とするのがふさわしい。ただし、妥当性を持つほど十分な資料を得るには、さらに④の練り上げられた選択肢を提供し、自分はそのいずれにあてはまるかと考えることを契機にすることも必要になってくるかもしれない。④については、なお聞いてみたい時、取り入れればよからう。

## 二 調査項目を設定するための基礎的考察

ここでは、次の三項目（及び下位項目）を設定する意義とそれを具体化した時の観点を明らかにしていきたい。

## 1 「私の国語科授業力診断」

国語科教材把握力について

国語科授業構想力について

国語科授業実践力（国語学習把握力・国語学習深化力を含む）について

国語科授業評価力について

## 2 時期区分を手がかりにした「私の国語教育実践史」（略体史）

—国語科授業力形成の筋道をさぐるために—

## 3 自らの国語科授業力を伸ばすために

## 1 「私の国語科授業力診断」

管見に入ったもので国語科授業力について言及しているものは、次の七文献である。

## ① 野地潤家博士稿「国語科授業力の問題」（『教科研究小学校国語』

二二、学校図書、昭和四七年八月一九七二年六月発行、『国語教育原論』共文社、昭和四八年八月一九七三年二月一〇日発行、二二五～二二七ページに再掲）

## ② 野地潤家博士稿「精確な国語科授業（論）の構築を」（『教育科学国語教育』一七巻二号通巻二〇〇号）

明治図書、昭和五〇年八月一九七五年二月一日発行、『国語科授業論』共文社、昭和五一年八月一九七六年六月一日発行、三六～四一ページに再掲）

## ③ 野地潤家博士稿「授業案づくりと発問の精選」（『教育科学国語教育』一七巻五号通巻二〇三号）

明治図書、昭和五〇年八月一九七五年四月一日発行、『国語科授業論』共文社、昭和五一年八月一九七

七六年六月一日発行、一九九～二〇五ページに再掲）

## ④ 野地潤家博士稿「教材研究の確立を求めて」（『授業に生きる教材研究』明治図書、昭和五六年八月一九八一年九月発行、『国語教材の探究』共文社、昭和六〇年八月一九八五年二月一日発行、四九～五六ページに再掲）

## ⑤ 大西道雄博士稿「国語科授業力の形成に関する研究——学生の教育実習体験を中心とする授業力の形成過程の分析と考察——」（『福岡教育大学紀要』第三六号第一分冊文科編、福岡教育大学、昭和六二年八月一九八七年二月一〇日発行、五五～六七ページ所収）

## ⑥ 吉田裕久氏稿「国語科授業力の精練——学習者の実態の把握、指導目標の設定、年間計画の立案を自前で——」（『教育科学国語教育』三八巻一〇号通巻五二八号）

明治図書、平成八年八月一九九六年七月二五日発行、一三九～一四〇ページ）

## ⑦ 中谷雅彦稿「国語科教師の授業力形成過程に関する一考察——詩学習指導実践史の検討を通して——」（『福岡教育大学紀要』第四六号第一分冊文科編、福岡教育大学、平成九年八月一九九七年二月一〇日発行、五五～七七ページ所収）

これらのうち、国語科授業力について最初に言及されたのは、野地潤家博士である。①の論考では、標題に「国語科授業力の問題」とあるように、自らの国語の授業の低迷・停滞をつきぬけて、「みずみずしい、気力の充実した本格的な国語科授業力へたかめていくために」国語科授業力を正面から問い直してみる必要性を説かれている。そして自らの「国語科授業力の向上」をはかる際に自覚すべきこととして、国語科授業力の区分とその改善・向上の着眼点を示されている。この論文を主にして、②～④の論述も参照しながら野地潤家博士の国語科授業力に対する考え

をまとめると、次のとおりである。

A 国語科授業力……国語の授業の目標・内容・方法の一つ一つを、学習者・教材に合わせて確かに具現化し、学習者にしみとおったものにしていく力。国語の授業を日々構想し、授業経験を積み重ね、学習者とともに作り上げた授業の実質を的確に評価していくことによって、徐々に身につけていくものである。独創的な国語の授業創造を可能にしていく源泉となる力である。

B 国語科授業力を構成するもの

(1) 国語科授業構想力……国語科授業力の根源の一つ。国語科授業を〔目標―内容―方法―評価〕という授業構造に即して組み立てていく力。国語科授業を、多角的に、あるいは単純化して、構想し、構築していく力。この力の有無が国語科授業力の水準を決めていく。

《国語科授業構想力を向上させるために》

A 自分の学級（学習集団）にふさわしい国語科授業をどのように企画し、実施し、その成果をたしかめていくかとしているか、

I どのような授業仮説を立て、独自の国語科授業にしているかとしているかを内省し、どこを改めていけばよいか、見通しをつける。

(2) 話述力（他にも授業の中ではたらく書写力、解釈力、文章表現力などが想定できる。）……授業力の基本の一つ。授業者の一言一句が学習者の心底・胸底にしみ入ってき、くいこんでいくように、傾聴させる力。国語科授業が個々の学習者の内面にほんとうに触れて成り立つか否かは、授業者の話述力、学習者の傾聴力にかかっている。

《話述力を向上させるために》

A 国語の授業の導入・展開・終結において、授業者の話述力が学

習者の傾聴力を生み出しているかどうかを観察し、学習者の傾聴力を生み出していない時には、どうすればよいか、対策を練っていく。

I 話述力はさらに説明力・発問力・助言力・司会力などに分けられるので、話述力のうちでもどういう力が不十分なのかを省察し、不足している力を訓練する機会を設けて鍛えていく。

(3) 国語科授業実践力……国語科授業力の中核をなす、国語の授業を実地に試み、推進していく力である。国語科授業実践力は、さらに、

①国語学力把握力（国語学習者の実態・実質を見抜く力）、②国語学習深化力（国語科授業を、たえず次元の高いものに、あるいは質的に深みのあるものにしていくかとする力）、③国語教材把握力（国語教材を周密に鋭くとらえる力、教材研究を推進し成就していく力）という三つに分けることができる。これら三つの力が相互に機能し合うことによって、国語科授業実践力は真に生きてはたらくものになる。

《国語科授業実践力を向上させるために》

① 国語学力把握力については、次の二点が考えられよう。

A 教材研究や国語科授業の計画・実践そのものに比べて、児童生徒の国語学力について適切・的確に把握することを軽く扱っていないかどうかを振り返る。

I これから取り組む単元・授業のばあい、授業の準備段階においては、何によって、授業が始まってからは、何と何によって学習者の国語学力をとらえていくかとしているかという国語学力把握の拠点の有無を調べて、確かな拠りどころとしていくための方策を案出する。

## ② 国語学習深化力については、次の二点が導き出せよう。

ウ 理解力（聞き、読むこと）・表現力（話し表し、書き表すこと）を深めることは、具体的にはどうすることなのかという典型を学習者の前に示すことができるかどうか吟味してみる。

エ 学習者の発言・記述の可能性を見抜いて、計画していた国語の授業以上に国語学習が深まったという充実感を学習者に得させるものにし得た時、なぜそのような授業創造が可能になったかを見直してみる。

## ③ 国語教材把握力については、④の論述「教材研究の確立を求めて」より、次の二点が手がかりにできよう。

オ 国語教材把握力について、(1)教材そのものの、教材の世界に融合していく力／(2)教材について発見していく力／(3)教材や教材の世界を透視していく力／(4)教材化していく力／(5)教材を制作し産出していく力などから光を当て、自らの教材把握についてなお十分なところを見いだしていく。

カ 教材把握（教材研究）は、主に授業の準備段階で深めていくものではあるが、国語の授業中にあつてもたえず自らの見解より高い解釈が生まれてくる可能性はないかと謙虚な姿勢で授業に臨み、自らの解釈が乗り越えられてこそ喜びであるという境地が確立できているかどうかを見直す。

## ④ 国語科授業評価力：一時間・一単元の国語の授業を振り返って、学習者の中に育ってきているものを見抜き、それに基づいて的確に評価していく力

## 《国語科授業評価力を向上させるために》

野地潤家先生の別稿「国語科評価の基本問題」（「指導と評価」一

八巻九号、日本教育評価研究会、昭和四十七年（一九七二年）九月発行、『国語科授業論』二二八―二三六ページに再掲）を参考にする  
と、次のようなことが含まれよう。

ア 本時の目標（と単元目標）と照らし合わせて、この授業を通して学習者の内面にはどのような国語学習意識、国語学力が育ってきたかを検討し、本時の授業実践が全体としてどういう意義をもつものであったかを考えることが習慣化しているかどうか。

イ 毎時間の理解・表現の学習過程・学習評価に、学習者の人間的努力を見いだし、人間としての成熟度を見いだそうとしているかどうかを振り返る。とりわけ、個々の学習者がどのように主体性を伸ばそうとしているかを、学習記録などによって洞察してみる。

ウ 学習者に国語科評価意識―学習意識（学習目標を明確に自覚して、国語科学習に打ち込もうとする）、規範意識（理解・表現における規範意識を正しく敏感にしていこうとする）、修正意識（理解・表現における自己の未熟さ・誤りに気づき、たえず修正し、練り上げようと思ひ続ける）―をどう身につけさせるかという見通しができているか、吟味してみる。

エ 自他の授業記録を見つめ直し、この授業の有する可能性を汲み尽くす練習を積むとともに、どう活用していくか（学習者にいかに戻元していくか）という手がかりを得るようにする。

## 「話述力」の保留について

これらのうち、「話述力」は、国語の授業に生きてくる教師の国語学力ともいべきもので、国語科授業実践力を背後で支えるものであろう。国語科教師は、むしろこの練成も欠くことはできない。ただし、教師に

必須な話述力・書写力・解釈力・文章表現力などは、国語の授業のためだけでなく、基盤となる言語生活を高めるためにも向上を期すべきものである。そうだとすれば、これらの国語学力は、国語科授業力の基本ではあっても、国語の授業にのみ求められるべきものではない。

また、国語の授業では、教師の話述力は授業が成立するか否かを決定する重要なものではあっても、なお要素的であり、話述力さえあれば、それらが総合的に国語科授業実践力として確かにはたらくとは言い難い。それゆえ、今回はこの項目を正面から問うことは避け、他の国語科授業力の各観点や次の国語教育実践史の中に必要に応じており込んでもらうようにしたい。ちなみに、野地潤家博士の④の論述では、話述力などは省かれている。

国語科授業実践力のうち国語教材把握力を特設させることについて

野地潤家博士が、国語教材把握力を国語科授業実践力に含められたのは、準備段階だけで終わらず、何より、国語の授業の中でこそ、①準備段階における教材研究が有機的に結びつけられ、②しかも絶えず高まっていくなすべきものと考えられてのことであろう。そして本来の国語教材把握力は、確かに国語科授業実践力の骨格をなすものである。

しかし、認定講習を受ける小学校教師にとっては、国語教材把握力は、国語科授業構想力がはたらく源として、それより前に独立して掲げておいた方が、授業を実際に作り上げ、実施していった経験とも照応しており、意識して記述しやすいのではないかと思われる。むしろ、最初に国語教材把握力を取り出すと、国語の授業中にはたらく国語教材を見抜き、ほり下げる力は上がってこなくなる。その点は、こちらが提供する事例にできるだけだけお持ち込むようにしたい。

そこで、国語教材把握力を改めて定義すると、国語学習者が学ぶに値する、どのような学習価値をもっているかに焦点づけて、国語教材を把握していく力ということになる。

以上のように修正を加えて、私どもが設定した国語科授業力診断の項目を改めて掲げると、左記のようになる。

- 1 国語教材把握力について
- 2 国語科授業構想力について
- 3 国語科授業実践力（話述力などが基盤になり、国語学力把握力・国語学習深化力が中核を占める）について
- 4 国語科授業評価力について

なお、⑤～⑦の国語科授業力の区分は、次のようになっている。

- ⑤ 大西道雄博士（昭和六二年）
  - ・ 国語科教材研究力
  - ・ 国語科授業構想力
  - ・ 国語科授業展開力
  - ・ 国語科授業評価力
- ⑥ 吉田裕久氏（平成八年）
  - (1) 学習者の実態の把握
  - (2) 指導目標の設定
  - (3) 年間指導計画の立案
  - (4) 単元の設定
  - (5) 教材・資料の準備、研究

## (6) 授業の実施

## (7) 授業の評価

(これらは国語科授業力の構成要素であると説かれている。)

## ⑦ 中谷雅彦(平成九年)

- ・ 国語教材把握力
- ・ 国語科授業構想力
- ・ 国語科授業実践力(そのうち実践報告の分析としては国語学力把握力に絞って上げている。)
- ・ 国語科授業評価力

私どもの分類は、⑤・⑦とはほぼ一致している。文献⑥は、このような項目も国語科授業力であるとしているが、(1)・(2)・(3)のように学年レベルで見通すものと、(1)・(2)・(4)・(5)・(6)・(7)のように単元・本時レベルで留意していくべき側面とが、含められている。これらも広義の国語科授業力を構成する要素とは言えようが、国語科授業力そのものの解明と言えるかどうか。なお、吟味してみなければならぬだろう。

単元レベル・本時レベルに絞ってみても、(1)学習者の実態の把握から(2)指導目標が設定され、(4)単元が考案された上で、(5)教材・資料の準備・研究に入るといえるのは、教育学の順序としては理解できるとしても、現場の国語科担当者の意識の中でも、そのように分節化され、それぞれ別のものとして、この順に取り組まれているかどうか、改めて見直す必要はある。吉田裕久氏の意図としては、国語科授業担当者として本来どこまで目配りが要るかを挙げたものとみられる。ただ、私どもは、①～⑤、⑦の文献と同じく、国語科授業力としての有機的な統合性を失

わない形で取り出した方が、現場で国語教育実践に打ち込んでいる方、必ずしも国語が専門だと思っていなくても国語教育に取り組まざるを得ない方たちの意識にも合うのではないかと考えた。

なお、吉田裕久氏の国語科授業力の区分は、上述のごとく国語の授業を実施し、評価していくまでに留意した方が望ましいという着眼点を網羅的に示すものであるため、必ずしも各自の国語教育実践史(個体史)の省察と自覚を要請するものではあるまい。ただ次節にふれるように、本来国語科授業力は、ひとりひとりが自らの国語科授業担当者として向上していくための原動力を自覚する手がかりとして提供されたもので、当然自らの国語教育実践のかけがえのなさを悟り、これまでの実践の歩みを振り返り、これから国語教育個体史(実践史)を自覚的に刻みつけることに結実するものであろう。この点についても、私どもは現場の混沌の中で、日々努力されている国語科授業担当者に内発的に個体史的自覚を促すものにしたと願って、後に記すように、「国語科授業力診断」を一層ほり下げるものとして、「私の国語教育実践史―国語科授業力形成の筋道を探るために―」を置くようにした。吉田裕久氏の論述との対照によって私どもが目ざしている方向を一層明確にすることができたことを感謝している。ただ、吉田裕久氏の真意を十分汲み取り得ていないのではないかと恐れるばかりである。それについては、是非ご高教を仰ぎたいと考えている。

(注) 国語教材把握力が国語科授業構想力の源をなすという見解も、

野地潤家博士の論述の中に見られるものである。たとえば、次の二つの引用に両者の結びつきが説かれている。

○「教材研究は、一つ一つの国語教材の中にくぐり入って、その内実をじゅうぶんに把握し、みずからの国語科の授業構想に自在に



生かしていくように進められる。」(『国語教材の探究』一七ページ)

○「丹念な、あるいは意欲的な、教材さがし→教材集積は、授業者に教材透視力・教材活用力とでも名づけるべきものを生み出してくる。まるごとの教材さがしに対して、一つ一つの国語教材の中にくぐり入り、その内実を透視し、その中から授業の成立と展開に真に必要なものを選びとってくるのである。(中略)

授業を、目的を見定め、具体的目標をおさえて、学習者(児童・生徒)の国語学力に応じつつ、教材内容をよく理解し、透視して、組み立て、展開させていくもとは、授業構想力である。その授業構想力の根源をなすものの一つは、ここにとりあげている教材活用力であるといつてよい。」(『国語教材の探究』一八ページ、なお、初出は「授業を生かす教材さがしの精神」(『教育科学国語教育』一九巻四号(通巻二三一号)、明治図書、昭和五二年八月七七日/四月一日発行)である。)

## 2 時期区分を手がかりにした「私の国語教育実践史」(略体史)の記述

—国語科授業力形成の筋道をさぐるために—

前節の冒頭に掲げたように、野地潤家先生の提唱された国語科授業力は、本来国語科担当者自身の国語の授業の低迷・停滞をつきぬけて「みずみずしい気力の充実した本格的な国語科授業へたかめていくために」あえて光を当ててみようとしたもので、当然、

① 現在の国語科授業力診断が、なぜ自らがこのような力がこれだけ身についたのか、また、これだけしか身につかなかったのかの内省を促し、

② これまでの自らの国語教育実践史のどこにこのような国語科授業力の源泉があり、なお、どこに問題をかかえていたのか、

③ どうすれば、さらなる向上を期することができるのかという、自らの国語教育実践史を振り返った上での個体史的自覚に行き着くものであろう。

そうだとすれば、②の国語教育実践史の記述と、③のさらに自らの国語科授業力を伸ばすための記述を調査項目に加えることが必要になってくる。

ここでは②の国語教育実践史の記述について、どのように調査項目を設定し、どのような形になれば、各自の国語科授業力形成の筋道が自ら見えてくるような国語教育実践史(略体史)の記述を促していくのかを考えていきたい。

私どもが何よりも手がかりとするのは国語教育実践史の時期区分である。自らの国語教育実践の歩みを振り返って、十数年間の膨大な実践を何期に分けられるかを考え、(ア)主にどのような授業実践を試みていたのか、(イ)そのような実践をしていくうちに見いだした課題は何であるか、(ウ)それを克服する契機はどのようにして得られたかを記述していくのである。

そして私どもが期待するのは、この時期区分が、各自の国語科授業力形成の筋道でもあり、前項との関連が判然とするように、実践者自ら各期の国語科授業力診断も加えて、国語教育実践史として記述してもらえらることである。

ただし、次節で実際に私どもが事例を用意しようとしてみて痛感したことであるが、いざ、両者を統合して見ようとすると、なかなか難しい。おそらく理想的にはそれぞれの時期において、

ア どのような取り組みをしたか、

イ そこでのような国語科授業力が育っていったか、

ウ その上で見いだした課題は何であったか、

エ それを克服していく契機はどのようにして得られたか、

という順序に記述されていくべきものであろう。しかし、記述にゆだねるとかなりの長文を要求することになり、自らの国語科授業への取り組みからそのおりの国語科授業力を導きだす力量が求められることにもなる。そうすると、記述の手が止まってしまい、具体的な実践例や教師の内面の苦悩も取り込んで、現時点に至るまでの国語科授業実践者としての向上・進展を大きく見通すことが困難になってくる。それを克服するためには、次の四つの点を考えることにした。

(1) 私たちが実際に記述してみた国語教育実践史を、例として掲げ、どのように時期区分をし、どのように記述していけばよいか、明瞭にわかるものとするともに、

(2) 主要な取り組みを手がかりに、各期にどのような国語科授業力が育ってきたかを、国語教材把握力／国語科授業構想力／国語科授業実践力／国語科授業評価力にわたって記述するのはたいへんなので、ふれられればそれに越したことはないが、代わりにそれぞれの時期を代表する授業の学習指導案、児童の学習記録、配布資料、発問・板書計画などを添えてもらい、記述者に無理にならない様式で書いてもらう。1の国語科授業力が、2の国語教育実践史の中でどのように育ったかは、添付された授業資料と記述された国語教育実践史（略体史）と照らし合わせながら、大学側の方で見抜くようにする。

(3) 最も順調な進展を遂げ、向上を期している人たちが多く三期区分を取っているので、むしろこちらから十数年の国語教育実践史を三

期に区切ってみるようになると、どのように見通せてくるかを、促していくような問い方を工夫する。

(4) 物語文の学習指導実践史、作文領域の学習指導実践史については、二、三十編にしても、各期にどのような歩みをしてきているか記述したものを検討しているため、各領域ごとにとどのような進展を見せるかという典型的な事例を用意し、それを参考にして自らの各期の国語教育実践の取り組みを記述してもらうようにする。それ以外の領域においても、編数は限られてくるが、平成七年度・八年度に記された国語教育実践史があるので、それを参考にしながら、各期の典型的な取り組みを探って、おいおい挙げていくようにする。

これらの手だてをとることによって国語教育実践者としての個体史的自覚と結びつけて、国語科授業力が進展していく経緯とその多様性を明らかにしていくことが可能になろう。

3 さらに自らの国語科授業力を伸ばすために

ここでは二つのことを問おうと考えている。

① 日々どういうことを願って国語の授業に臨んでいますか。

② 現在かかえている国語教育実践上の課題はどんなことですか。

これらについては、すでに「国語科教師の指導力形成過程に関する予備的考察―国語教育実践史の記述を手がかりにして―」（福岡教育大学国語科研究論集）第三七号、福岡教育大学国語国文学会、平成八年（一九九六年）一月発行、三三ページ）に考察を加えている。

③ ①は、現在の実践をさらに一歩進めるために自らに課した国語科実践指針

④ ②は、国語科担当者としてさらなる飛躍を期する実践上の手がかり

だと考え、いずれも先に国語教育実践史を記述していればいるだけ一層、明瞭に自覚できるものとしてきた。

今回は、これらに自らの国語科授業力を育成することと結びつけた時、どういう意識が加わり、どのような調査のしかたが望ましいかが、問題になってくる。端的に言えば、さらに自らの国語科授業力を伸ばすために、④・⑤について記述してもらうのだと了解してもらうことによって、④・⑤に筋金が入り、記述する教師にとっても、これらをどう生かすかが自覚でき、以後の自らの実践上の努力目標を見きわめるのに役立つものとなる。

なおこれについても、参考となるいくつかの事例を掲げ、このようなことを挙げていくのか、それなら自分のばあいはいと考えると、意欲をもって書き進められるものにした。

(注) 野地潤家博士の「学習指導法改善の視点」(『初等教育資料』三二二号、文部省小学校教育課・幼稚園教育課編集、東洋館出版社刊、昭和四九年八月九日発行、一五五ページ所収。引用部分は、『国語科授業論』一五七ページに再掲。)には、自らの授業に臨む心構えとそれまでの国語科授業経験、学習指導法研究との密接なかわりが、次のように記されている。

「学習指導法の改善を問題とする場合、その視点の一つとしては授業者(指導者)みずからの授業への姿勢が問われなくてはならない。みずからの授業を組織するにあたってどういう理念、どういう方法を用いているのか。また、みずからの授業に臨む心構えを数カ条にまとめるとすればどのようにまとめることができるのか。まとめられる数カ条には、おそらく授業者自身の授業経験や学習指導法研究の成果が結晶しているにちがいないのである。」

これによって自らの授業に臨む心構えが、それぞれ国語教育実践の歩みから導き出されることは明らかであろうが、これを記述することが、また、これからの学習指導法改善の契機となるというのであるから、この心構え一つによっても、それぞれの国語教育実践の歩みの大体と、これからどう向上しようとしているかもうかがえることになる。ただ自らの授業に臨む心構えを数カ条記述してもらうことは、現場の国語科担当者にとっては、かなり負担になるかもしれない。その前に、「私の国語科授業力診断」と国語教育実践史の記述を求める際には、もっと簡潔な一、二項目で十分であろう。

### 三 調査内容の具体化に向けて

—「私の国語科授業力診断」の記述を通して—

前節において、「私の国語科授業力診断」・「私の国語教育実践史」・「さらに自らの国語科授業力を伸ばすために」を設定する意義と観点はおおよそ承認されたとしても、さらに肉づけるためには一度私どもの方で記述してみて、何をどういうふうにかき、いかなる考察のものさしを用意すればよいかを明らかにする必要がある。

そこで、以下「私の国語科授業力診断」に絞って、考察者自身の国語教育実践を対象にして実際記述してみた。二人の共同研究であるため、二例をとりあげる方が望ましいが、紙数の関係で一編にとどめている。

#### ◇ 私の国語科授業力診断

##### A 国語教材把握力

国語教師(中谷のばあい)として高等学校二三年、大学二年半を過ごし、教材把握については、時間をかけてかなり努力してきた。そのおかげで、教壇十年目ごろから学生・生徒に突っ込まれて困ることはなくなり、

時間と資料があれば、自分の納得いくところまでできるという自負は湧くようになった。ただし、野地潤家博士が国語教材把握力について記された次の五つの着眼点を念頭に置いてみると、また別の感慨が湧いてくる。

- 1 教材そのもの、教材の世界に融合していく力：教材に接近し、教材の世界にくぐり入りその内界を明らかにし、教材と一体となり、わがものとしていく力。融合の極致は愛誦になる。
- 2 教材について発見していく力：授業者自ら教材に接し、教材を読み深めていくことによって、新しく見いだし、とらえていく力
- 3 教材や教材の世界を透視していく力：国語教材の構造と機能を見透かしつつ、その教材に国語学習上どういう体系あるいは内容が含まれ関連しあっているかを透視する力。端的には教材の中に国語科教育の学習（指導）体系の縮図を見抜く力。（以上と後の5は、『国語教材の探究』五〇～五一ページに拠る。）
- 4 教材化していく力：学習者に最適の国語教材を発見し、選択し、編成していく力。（この項のみ『国語教材の探究』九ページによる。）
- 5 教材を制作し、産出していく力。

私が努めてきたのは、せいぜい、1教材への融合と 2教材についての発見である。それも繰り返し読んでいつのまにか愛誦するに至ったり、教材についての発見が相ついで、興奮のあまり眠れなくなり、自分の発見を文章化しようとしなくてはおれなくなったりするというような境地にはまだ至っていない。3教材透視力を身につけて、教材の中に生徒、学生の学習体系の縮図を見抜くことは、漠然とはしていても、なかなか意識化できず、4自ら独自の教材化をはかることについても時おり試み

るにすぎない。5教材制作（産出）についてはまだ一度も試みていない。こうして見ると、私を含め現場教師が努力しているのは、ほとんど1融合と、2発見であって、それも多忙に追われて究極のところまでは行き着かず、3教材透視、4教材化は若干試みる程度、5教材産出については及びもつかない現状であることに気づかれてくる。国語教材把握に關して、熟達の境地にはほど遠いことがわかってくるのである。この診断をする以前には、国語教材把握力については、自分の理想とする実力の八割程度身につけたのではないかと実感的には思っていたが、望ましい国語教材把握力から言えば、せいぜい四、五割のところに来たに過ぎないのだとわかり、愕然とさせられる。

国語教材把握に対する基本的姿勢については、まず自分の読みを確立させてから、参考文献、先行する実践などによってそれを補強するという態度が、教職十年目ぐらいから確立してきた。それまでは教師用指導書にそった借り物の授業で、生徒から強力な解釈が出されると、それでもこうといえなくなっていた。読みの授業であれば、授業で支えになるのは結局自分の読みだということに気づかれてきたのである。以後は、さまざまな角度から参考文献を求め、さらに客観性をもった自分独自の授業を作り上げる源となる教材把握にしようと努めている。

教材研究の基本作業としては、本文の黙読と時おりの音読である。繰り返し読んで表現に即して作品の価値を取り出すことが主になる。時間があれば、作品が収められている原典を読んでその部分が占める位置を明らかにしたり、同じ作者の別の作品集を読んで作者理解と結びつけたりもしている。ただ、いずれも多くの先生方も自らに課しておられることで、私独自の教材研究の基本作業と言えるものにはなっていない。そして、黙読と音読の継続はよいとしても、マンネリに墮す可能性も否定

できない。継続性は持ち続けつつも、毎回新鮮な思いで教材研究に取り組めるように工夫していかなければならない。

教材研究をしていく観点と順序については、基本的には、文学教材の場合、次のような過程で進めてきた。

ア 作品を黙読しながら、ていねいにたどっていき、気づきを書き込む。

イ 再読して、ぜひ学習者に気づかせたい感動的な内容(主題)と主題を支えている表現を大きく見通すようにする。

ウ 構成、場面場面の主人公の心情の変化を、表現に即して細かく整理し、図表化する。

エ 主題の再確認をする。

オ 補足的に、擬音語・擬態語、比喩表現などの表現の特色とその効果について整理する。

このように挙げて見ると、西尾実説にしたがった主題感動(イ)↓構想・叙述の整理(ウ)↓主題の再確認(エ)という、主題の想定から構想・叙述へとおろしていく側面と、本文に気づき(叙述についての)を書く(ア)↓その上で構想・叙述について整理する(ウ)↓主題の再確認(エ)という下から積み上げていく側面とがいずれも入っている。

どちらかに方向づけた方が、見通しがつけやすくなると思うのだが、このような形で、十数年続けていることを思うと、このような観点・順序づけにも全く意味がないとは思えない、おそらく、私自身の独自の教材研究の観点・順序を生み出す母胎になるのであるが、現在ではなおどいう方向に進んでいく可能性があるか、見きわめられるまでには至っていない。従って、教材研究の観点・順序は自分なりについており、その修練による体得もできているが、作品の特性にふさわしい、焦点化し

た教材研究については、散文のばあいも詩のばあいも時々試みる程度である。読みの目的に応じた、多様な教材研究への進展をはかることは、まだこれからである。

## B 国語科授業構想力

現場の教師は、日々明日の授業をどうするかに迫られている。それだけに明日の授業をどう組み立てるか、いかに構想するかは常に考えざるを得ない切実な問題である。導入にこった時期もあり、何といっても内容がしっかりしていることだと展開を充実させることに力を入れたこともあった。したがって、国語科授業力全体の中では、最も力を注ぎ、安心もできるものである。授業実践力の育成と比べてむしろ国語科授業構想力の方に比重をかけてきたと言える。授業構想をしつかり立てて、それを実現することが主だという意識が従前からあり、またずっと授業をしていくうちに、その信念は一層強くなってきている。

(1) 実践目標を見きわめる力の修練については、大きく教材中心から学力中心へ、そして、散文領域・詩領域の指導目標の体系を見据えた授業構想へと進んできた。

教材中心の時期には、文学作品の授業において、①教えるべきことが見いだせず、四苦八苦する段階、②教えたいことがあり過ぎて、目標にまで集約するには至らない段階、③文学作品を通して教えたい内容は焦点化できたものの、それがそのまま目標に挙がってきてそこでどういう国語学力が身につくのか、見通せない段階などを経た。②、③の傾向はまだ完全になくなってはいない。

学力中心の時期になると、これまでの一時間一時間の目標設定ばかりか、単元レベルでそういう解釈に行き着かせることによって、どうい

力を伸ばすことになるのかを考えるようになった。そして、少しずつ目標同士の関連や目標構造も自覚して、そこから目標達成にふさわしい単元の授業構想の原型を導き出すこともし始めた。ただし、④学年レベル・領域レベルにおいて、指導目標の全体系を見据えた授業構想にやつと足を踏み込むようになったに過ぎない。

さらに、⑤単元を通して指導目標を設定する際に、学習者の学力形成の筋道が学習者自身にも明瞭になるようにと細心の注意を払い、それによって予め考えていた指導内容の練り直しをつねに己に課すことや、⑥国語科授業実践の原動力となる実践目標を発想し、独自の指導内容・方法を創造するように努めることはまだしていない。

(2) 多角的な授業の立案に関しては、

ア これはと考える国語科学習指導案、指導方法を求めて手探りを重ねる段階（初任者時代三年間）

イ 少なくともこの授業は学習者に確かに国語学力をつけることができるという国語の授業構想を確立する時代（五、六年目から十年目くらいまで）

ウ 漠然とはあるが、別の授業形態、授業方法はないかと常に求めており、二、三の案を頭に思い浮かべて、その中から一つの授業構想を選ぶようになる段階

エ さらに国語科の授業者として伸びたいと願って、意識的に一つの実践目標に対して、ひそかにこれならと思える指導案、指導方法以外にいくつかの授業形態、授業方法が案出できるかを考えあぐねたり（たとえば、大村はま氏の実践）、読解単元、読書単元として活用するばあいなどを考えていくつの実践目標として結実される可能性があり、それに応じて新たにどのような授業計画、授業方法が生み

出されるかと探ったりする段階

などがあるが、私のばあいはウの段階どまりで、エの段階には至っていない。頭の中で行っている多様な授業構想を思いつき、そこから最もふさわしいものを選んでいくという過程を文字化し、誰もが納得のいくものにするのが、自らの国語科授業構想力を伸ばすためにも必要だということを感じている。

(3) 自らの立案した国語単元の授業構想を見つめなおし、個性的で本格的なものにしていく点については、小・中・高の国語科担当者にとっては、のばしていくことがなかなか難しい。多忙な実践者にとっては、ア 自分で思いついた国語の授業計画、指導方法で安心し、なお学習価値のある国語の授業にまでは考えが及ばない段階

が最も一般的であろう。私自身は、赴任当初から研究環境に恵まれており、実践報告も年に一、二回ずつと継続することができた。したがって、わりと早い時期（五年目くらい）から、

イ 改めて学級のひとりひとりを思い浮かべ、このような国語の授業が実施された時、どの子も学び甲斐を感じるものになるかどうかを見直し、なお改善していくべきところを見いだそうとする段階に來ていた。ただし、

ウ 自らが新たに試みようとしている国語科学習指導案に、国語の授業に対するどういふ仮説がひそんでいるかを顕在化させ、その仮説に最もふさわしい指導過程、方法なのかどうかを見つめなおしてみる段階

には踏み込んでいない。むしろ教職十年目ころから、そのような研究仮説を自覚化してこそ、独創的な国語の授業が生み出せるのに違いないとは思ひ、実践報告する際にも、そのような研究仮説をおぼろげながら心

にいだこうと努めてきた。ただしそれを明確化すれば、なんとしても検証せざるを得なくなり、こちらの出した学習指導案や授業の過程、学習者の反応についても、いっそう厳しい吟味の矢が向けられるのは必定である。それで研究仮説を明確にした授業構想にまでは進めなかったのであらう。しかし、私の国語科授業構想力の伸長からみれば、大きなマイナスだったことを認めざるを得ない。

### C 国語科授業実践力について

長年にわたる授業実践の中で体得し、信念のようになっていているものの一つに、「国語学力は学習者が意欲をもつて主体的に取り組んだ時、最も効果的に身につく」という考え方があつた。そのような主体的な取り組みがなされ得る授業をと思い、学習者ひとりひとりに手を差し伸べる授業をめざして、ずっと国語科授業実践に打ち込んできた。しかし、改めて振り返ってみるとグループ学習も一斉指導も試みたが、なお個人個人の心にふれる授業実践力が発揮できていたかどうか、確かでない一面が残る。授業構想を比較的きちんと立てていき、授業ではそれをできるかぎり実現していきたい方だったので、生徒・学生にあつと思わせる要素に欠けていたかもしれない。冷静に見れば、私の場合、国語科授業実践力は、授業構想力と並ぶところまではいかないようである。

### (1) 国語学力把握力にしようて言へば、

ア 目の前の国語学習者の国語学力が漠然としかたえられず、教材を教えようとして授業を進めていくうちにうまくいかず、啞然として、学習者の述懐を聞いて愕然としたりする段階

が三年ぐらい続いた。四年目に、三次高校に転任となり、最初の授業で生徒から教育の根底にかかわる質問を突き付けられ、国語の授業も教材から出発するのではなく、学習者の実態から出発するのでなければなら

ないことを痛感させられた。それから、生徒の国語学力把握に努めて十年目ぐらいに至つて

### イ 経験的に生徒の国語学力把握がある程度できる

ようになつてきた。しかし、それだけでは不安なので、

ウ 読書生活の実態、文学作品の第一次感想などを記述させて、学習者の意識と能力を正しく診断した上で国語の授業を繰り広げようとする

に至つた。これは現在でも継続しているが、大村はま氏のように、次のようなことを試みるまでには至っていない。

エ もっと深いもの、学習者自身も気づいていない内面に迫ろうとして、学習者の方から能動的に言葉を発するような機会を用意し、そこでどのような生きた国語学力、国語学習の態度が把握できるかを文章化し、他の人からの吟味もうけられるようにしていく段階

国語学力把握力一つをとつても、とらえる深さにはきりのないことを思い知されるのである。

### (2) 国語科授業実践力の要になる国語学力深化力については、

ア 即決が求められる授業の中で、学習者の反応ごとに手を打つが、それが目標達成とつながっているかどうか判断としなくても、何とか破綻を来たさずに国語の授業をし終えたということで、胸をなでおろす段階

も二、三年あつたが、

イ 最大限国語学習者の意見を汲み取りながらも、なんとか初めに立てた実践目標を達成しようと悪戦苦闘し、学習者がせつぱつて何をどうしてよいかわからない時には、自ら典型的な読みを提供して、学習者の文学開眼を促していく段階

を長期にわたってつづけてきた。なお、次に掲げる要素も少しずつ取り込もうと努めているところである。

ウ 国語学習者の発言・記述の中に、予め想定した実践目標を越える可能性を見いだし、国語の授業を学習者の主体的な国語学習の深化過程、創造過程として作り上げていくことができる段階

ウのような授業は、生涯に数度しか作り得ないともいわれているが、こうした授業創造への憧れが、日々の国語科授業を学習者との共同の創造的営為に近づけていくのであろう。

D 国語科授業評価力について

日々国語の授業をしていかなければならない現場の実践者にとって、この国語科授業評価力は最も自信の持てないものである。私のばあいも、先輩教師の実践報告によって、教職十年目ごろから毎時間最後に五分程度の時間をとって講義内容や自分の学習への取り組みについて感想を書かせるようにし、学習者の努力ぶり、自己評価力の伸び、授業評価の手がかりを得ようとしてきた。ただし、それらが一体的になっっている自らの国語科授業評価力をいかに伸ばすかという点に意識が及んでいなかった。それを分析的にとらえていけば、次のようになる。

(1) 児童・生徒の国語学習に注いだ人間的努力の評価に関しては、

ア 何を手がかりにすれば、児童・生徒の国語学習に注いだ人間的努力が見えてくるようになるかわからず、二、三の学習者の表情から本時学習の成果を即断するか、客観テストの評点をもとに、そこに至った過程を推察していくしかない段階

イ 国語学習記録やカードなど、学習者の努力ぶりを認める拠点はとらえながらも、それぞれの箇所に評価の言葉を加えたり、次の国語の授業に学級全体としての努力ぶりをたたえて、さらなる進展への

方向を示唆したりして、手探りのうちに経験的評価を積み重ねていく段階

を歩んできた。実践報告の中で、次のウの要素も少し加味しようとしたが、なお着手した段階でとどまっている。

ウ 拠点をもった経験的評価に終始せず、それがどこまで学習者の胸にしみこむものになったか、どのくらい以後のさらなる努力を喚起するものになったかも含めて記録し、自らの判断に対して客観的妥当性と的確性を増していく段階

2 学習者自身に国語科評価意識が育ったかどうかの評価については、

ア 国語の学習活動に取り組む様子からは、国語学習に打ち込もうとする学習意識も、このような存在になりたいという規範意識も、自他の言語を修正していこうという意識もはたらいっているようには見受けられず、どこをどう伸ばしていっただけか途方に暮れる段階は卒業したが、次に示すような授業はなかなかできず、模索が続けている。

イ 学習者の目を輝かせる快心の国語の授業を作り上げることができ、それを契機にして、学習者の中に、国語の勉強をするんだという学習意識が芽生え、国語に対する規範意識がそだってきたため、さらにここをこう伸ばしていけば自己評価意識がさらに高まっていくであろうと推察し得る段階

さらに、次のような段階に進めることを願っている。

ウ 学習者が理解と表現における理想を見いだし、規範意識も確立し、修正意識も絶えずはたらくようになって、この学習者（この学級）は国語学習に打ち込む姿勢が確固たるものになったと言えるようになり、自己評価意識をさらに高めるための方向性が、それぞれの個



人差に応じた形で示唆できる段階

### (3) 国語科授業の総体的評価については、

ア 国語の授業を実践し終えるのに精一杯で、授業後に湧いてくる充実感、徒労感、挫折感、空虚感などを書き残しておこうと思うには至らず、次の授業をどうすればよいかを導き出す余裕など持てない段階

ではなくなり、

イ せめて略式の学習指導案なり、発問・板書計画なりを用意し、授業後の反省、評価を一言なりとも残して、おりあらば見つめ直し、少しでも自らの国語科授業評価力を伸ばしていく方向を見いだそうとする段階。

に進んでいる。しかし、次のウについては、そうしたい気持ちはあってもなかなか実現できずにいる。

ウ 毎時間国語の授業をしている以上、これと思う単元授業については、学習指導案のみならず、授業中の一時間の肉声をまるごと残そうとし、文字化して、対象に引き据え、前年には見えなかった授業者自身の願いと学習者の反応との接点が発見できるように becoming たか、そしてどうすればよかったかと考察を加え、次の授業のあり方として学習者に示すことができる段階

### おわりに―成果と課題―

本研究の目的は、小学校教師が自ら国語科授業力の向上を願い、その手がかりを得ていくような調査内容のあり方を明らかにすることであった。そのために、調査項目（内容）設定に関しての基礎的考察や調査内容の具体化に際しての事例などについて検討してきたが、次のような成

果と課題が明らかになった。

#### 1 「国語科授業力の向上」というときの「授業力」の内実を明らかにしたこと。

これまで私どもの中であいまいであった「授業力」の内容を明確にするため、四名のべ七編の「国語科授業力」に関する論考をとりあげて考察し、野地潤家博士の考えをもとに、国語科授業力を構成するものとして、「国語教材把握力」、「国語科授業構想力」、「国語科授業実践力」、「国語科授業評価力」の四つの授業力を指定することができた。

#### 2 国語科授業力をとらえるより有効な方法として、「記述」を中核とする方法を指定できたこと。

#### 3 国語科授業力の向上を診断するものさし（観点）を、仮にはあっても取り出すことができたこと。

この度は中谷の国語教育実践史の診断を手がかりに、「国語科授業力診断」のものさしを取り出すことができた。今後は、前田の国語教育実践史についても診断し、より確かな国語科授業力診断のものさしを設定したい。そしてそれをもとに国語科授業力診断の参考となる事例を作成して、次回の免許法認定講習会で小学校の先生方にその事例を提示し、「私の国語科授業力診断」を記述してもらうという方向で考えていきたい。

なお、「私の国語教育実践史」、「さらに自らの国語科授業力を伸ばすために」についても、私どもの実践の記述を手がかりとして記述の観点を明らかにし、記述の際に参考となる事例の作成に向けて検討を重ねていきたい。

#### 4 小学校教師の国語科授業力・国語教育実践史の記述に際してのモデルは、ゆくゆくは小学校教師のものを用意する。

小学校の先生方に自分の「国語科授業力診断」について記述してもらうのは初めての試みであるので、このたびは、私どもが実際に記述し、それを手がかりにしてモデルを作成することを考えているが、「国語科授業力診断」にしろ「国語教育実践史」にしろ、記述の内容は小学校教師の授業に関することであるので、参考とする事例も、本来は小学校教師の国語教育実践をとりあげるべきであろう。ただ、現時点ではそのような事例はほとんどないので、そのような事例を収集するところから始めなくてはならない。今後の課題である。

#### 付記

本稿は、中谷が「一 国語科授業力を見抜くための調査方法」・「三 調査内容の具体化に向けて―私の国語科授業力診断」の記述を通して―および「おわりに―成果と課題―」を執筆し、前田が「二 調査項目を設定するための基礎的考察」を担当して、後で協議して一貫するよう努めたものである。